

棚尾地区まちづくり事業

平成 24 年 7 月 25 日（水）19 時～

棚尾公民館 3 階

第 1 3 回 棚尾の歴史を語る会 次第

進行（小笠原幸雄）

1 前回までのテーマに関する参考意見など

秋葉山常夜灯、道路元標、折戸の坂、東浦の分村など

2 テーマ 24 「北棚尾村の分村」

(1) 説明（杉浦光雄）

(2) 出席者による補足説明、感想など

3 テーマ 25 「明治の南極探検清水光太郎」

(1) 説明（磯貝国雄）

(2) 出席者による補足説明、感想など

4 連絡事項・情報交換など

5 次回日程

第 14 回 8 月 29 日（水曜日）午後 7 時から

「中山の分村問題」「若宮社」

第 15 回 9 月 26 日（水曜日）午後 7 時から

「地蔵祭り」「相撲取清見潟又市」

北棚尾村の分村

一、北大浜村の分村

北大浜村の分村運動は、明治十六年頃、大浜村北部の有力者板倉玄四郎、加藤稻吉、岡本三次等が中心となって計画された。

明治十五年二月四日、大浜村の臨時村会は、傍聴禁止のまま開かれた。村会は、予想通り分村要求を否決した。

この件について、同年十月、大浜村北部人民岡本坂太郎外八百九十四人が、愛知県令国貞廉平宛に分村願を提出した。しかし、同月三十日、この分村願は「難及詮議」として返された。

そこで、同年十一月になって大浜村北部人民岡本坂太郎他八百九十五人の連印を以て、分村請願書を提出することになるが、その要旨は前回より更に詳しく述べている。

結局、明治十六年十一月二十八日、請願は聞き届けられ、宿願は達成された。「難及詮議」とされたものが、なぜ聞き届けられたのか。その経緯は不明である。

二、北棚尾の分村

棚尾村は、従来南組（本郷）、中組（東浦、中山）、北組（東山、西山）に区分されている。

東山、西山の開拓は元禄期とされ、『村明細帳』には棚尾村新田とあり、秋葉社（東山）、御鋤社（西山）があった。ただし、

氏神は八王子社（現八柱神社）であった。

八王子社の神主は、大浜村下の熊野神社神主長田求馬もとめが兼任し、棚尾村の百姓が下禰宜を勤めていた。天明九年十一月南組の善四郎退役の後、慣例により北組の百姓が跡役を勤めるべき処、南組の磯八が下禰宜となったということで、長田求馬もとめに異議を申し立てた事件があった。結末はどうなったか分からない

が、こんな揉め事は間々あったであろう。

明治十五年の北棚尾の戸数は百七十七戸、人口は七百八十三人であった。

この北棚尾が分村するのは、明治十六年八月であるが、明治二十二年には北大浜村と合併している。(明治二十一年という説もある) 北大浜村は、明治二十五年新川町と改称した。

北大浜村と北棚尾村の分村で際立つ違いがある。北大浜村の場合随分難行したが、北棚尾村の場合すんなりと発足することができた。飛地ということもあるだろう。また、経済的地位が低かったからという事もあるかもしれない。

北棚尾村の経済的地位が低かったという事について、林口孝氏は次のように述べている。

「飛地である為に経済的地位が低いというなら当然であるが、東山、西山は本郷に較べて富裕度は高かった。即ち、東山は全農家に対して無高率は五十一%で、本郷は七十二・五%であり、

しかも東山には十一町七反の大地主と、七町歩との二名があり、その他耕地を有する家は三十六戸で全戸数の四十一%に当るに對して、本郷の最大地主は六町六反で、その他耕地を有する戸数は全戸数の二十一・七%であつて、東山の半分の比率である。

西山の富裕度については、明治七年の戸籍簿が見当らないので比較はできないが、東山よりも借宅地が少なく、醸造兼質屋兼地主の鳥居家、宮大工棟梁の岡島家、地主の小笠原、川隅両家、服部長七の隆盛によって、高いと推定する。棚尾村が北棚尾の分離を承諾したのは、単に形態上の止むなきであり、実際には、先に東浦を明治九年の飛地交換で失い、今また東山、西山の分離は、本郷にとつては、『本村追々分離衰村におよび候』(明治十七年四月一日共有物品請渡証書)の通り、多くの豪農を分村で失った。分離衰村の感がひしひしと胸中を去来したのである。この分離衰村の悲運を挽回する為の精進が、今日の棚尾の隆盛をもたらしたと考えるのは間違いだらうか。」(『碧南におけ

る明治期の町村分合』北棚尾村の場合 林口孝 碧南市史料
第三十三集 昭和四十年)

参考文献 『北大浜村と北棚尾村の分村問題』村瀬正章 碧南

市史料 第一五集

『碧南における明治期の町村分合』林口孝 碧南市

史料 第三十三集 昭和四十年

「明治の南極探検清水光太郎」

1 要旨

100 年前の明治 45 年（1912）1 月、南極の地に日章旗がひるがえった。歴史的壮舉を成し遂げた白瀬中尉率いる南極探検隊の中に、探検船「開南丸」の機関長として、棚尾村出身の清水光太郎が参加した。帰還後の大正元年（1912）8 月、棚尾村で同氏の無事帰村と栄誉を讃え歓迎会が催された。

2 南極探検の偉業

明治の南極探検については、西尾市吉良町瀬戸の西林寺墓地及び隣接する瀬戸神社境内に石碑が整備されているので、以下その碑文によって説明する。

明治 43 年（1910）11 月白瀬轟（のぶ）中尉（1861～1946）を隊長とする日本初の南極探検は 204 トンの帆船「開南丸」で東京を出港したが、南極圏の悪天候にやむなき引き返し、翌明治 44 年（1911）5 月 1 日、シドニーに入港しました。

シドニー湾岸を転々とした後、隊は最終的にパースリィ湾の旧キオスクの浦に居所を設営することができました。シドニー大学のディヴィット教授の物心両面の援助に支えられ、同年 11 月 19 日隊はスコットとアムンゼンの跡を追い、再び南極へと出航しました。明治 45 年（1912）1 月 28 日白瀬中尉と 4 名の隊員それに 28 頭の犬からなる白瀬の「突進隊」は南緯 80 度 05 分に到達しました。

隊の最南地点到達 90 周年と、日本とオーストラリアの初期の友情を記念し、両国の永遠の友好の証として、この記念銘板を設置いたします。

2002 年 3 月 27 日

オーストラリア ウラーラ市長 ジョンコーミノ

白瀬中尉生地日本国金浦町長 佐々木松美

この説明版はオーストラリアのウラーラ市（シドニーの東隣の町）にあるものを平成 14 年（2002）8 月に吉良中学校生徒海外派遣団が撮影した写真をもとに作成しました。

3 白瀬矗（のぶ）隊長の略歴

生い立ち

文久元年（1861）秋田県金浦（このうら）村（現金浦町）に生まれた。

十歳のころ

寺小屋の師匠から北極の話を聞き、北極探検を誓い、五つの物断（酒・たばこ・湯・茶・寒中の火）を始める。

千島探検

32 歳、明治 26 年（1893）北極探検に備えて、千島探検に加わった。

北極より南極へ

48 歳、アメリカ探検家ピアリーの北極点到達（1909）を知り、目標を南極点に切り替えた。

出港

明治 43 年（1910）11 月隊員 27 名を乗せた木造帆船「開南丸」は品川港を出発 5 万人が見送った。

「大和雪原」命名

明治 45 年（1912）51 歳 1 月 28 日午前 0 時南緯 80 度 5 分西経 156 度 33 分に日章旗を立て大和雪原と命名。

帰港

同年 6 月全員芝浦に帰港、英雄を迎えて国中沸き立った。

晩年

報告と隊員給料支払いのため、講演行脚を続けた。昭和 21 年（1946）9 月 4 日、愛知県挙母町（現豊田市）で 85 歳の偉大な生涯を閉じた。

4 西尾市吉良町との関連

昭和 22 年（1947）

次女タケコ（敬称略）は横須賀中学校（吉良中学校）に奉職、やす夫人の孫、喜子もこの地に転居。

昭和 26 年（1951）

やす夫人逝去、タケコ・喜子ご両親の遺骨を西林寺に仮埋葬して東京へ転居。

昭和 32 年（1957）

郷里秋田県金浦町浄蓮寺に分骨。

昭和 33 年（1958）10 月 4 日

吉良町史跡保存会により墓碑建立。

平成 3 年（1991）

ふるさと創生事業により募域を整備。

白瀬南極探検隊長墓碑建立の由来

日本人として最初の南極探検を企て、南緯 80 度 5 分の前人未踏の地に至り、一帯を「大和雪原」と命名し、日章旗をうち立てた世紀の偉人白瀬矗（のぶ）氏は奇しくも第一次南極観測隊長永田武氏の郷里現在の豊田市に住み、昭和 21 年 9 月 4 日 85 歳の生涯を終えられた。

かくて、やす夫人は、昭和 22 年末夫君の遺骨を抱き、次女タケコ孫喜子と共に、故あって吉良町（当時横須賀村）瀬戸に転住し、ここを永住の地と定め、本籍を当町に移された。しかし、やす夫人は昭和 26 年 4 月病を得て死去され、タケコさんは両親のお骨をここ西林寺の墓地に仮埋葬して昭和 27 年喜子さんと共に東京へ移住された。

昭和 32 年 3 月白瀬隊長の甥にあたる秋田県金浦町の白瀬知燈氏が来町され、分骨を請われて初めて白瀬隊長のお骨が残されていることを知った。ただちに関係者並びに吉良町史跡保存会はこの地を浄域と定め、元侍従長藤田尚徳氏の揮毫を得て、墓碑を建立した。

本年度墓域を整備するに当り、改めて由来をここに明記する。平成 3 年 9 月

吉良町（西尾市）教育委員会

5 清水光太郎

(1) 明治 8 年（1875）4 月 27 日、清水栄十（父）、こう（母）の二男として棚尾村 541 番戸に生まれる。

(2) 棚尾村での歓迎会

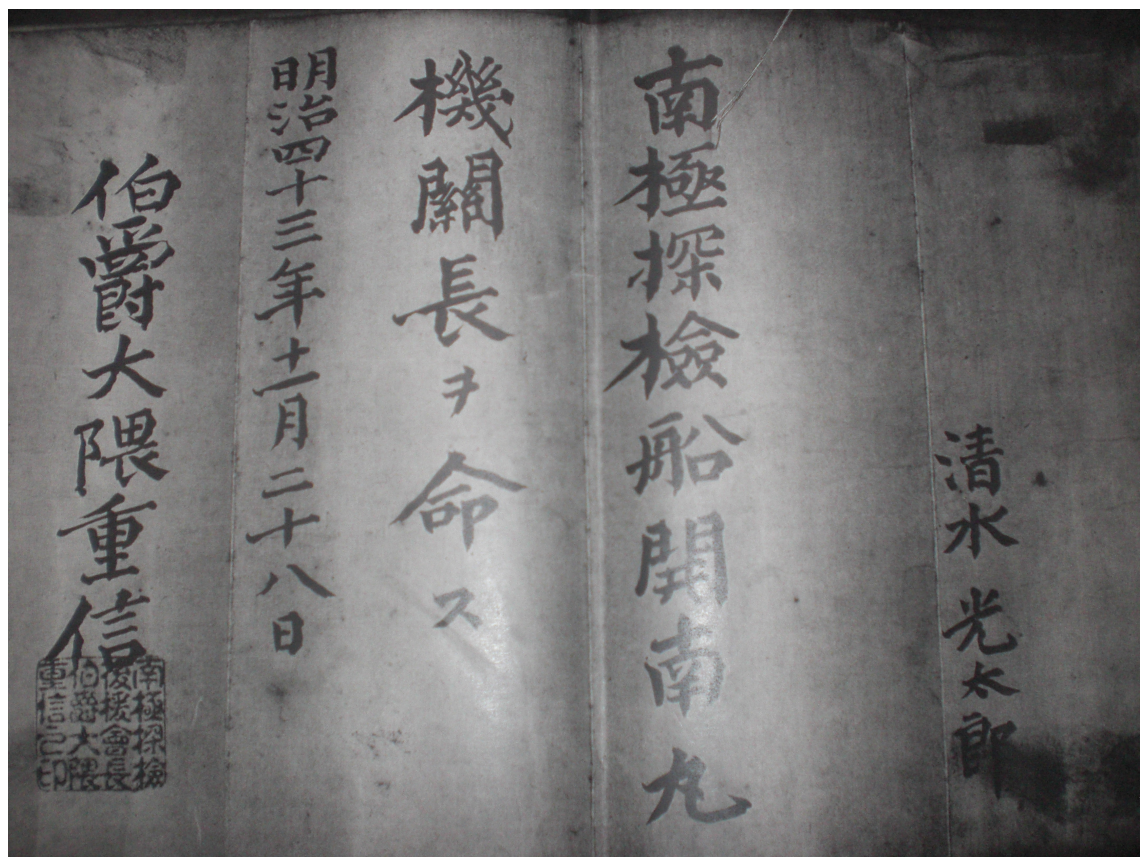
（永坂奎兵衛の手帳）

大正元年（1912）8 月 10 日 棚尾村出身清水光太郎君 南極探検船開南丸機関長トシテ無事帰村ニ付歓迎会ヲ催ス

- 一 南極 80 度以上進ム
- 一 氷山ノ間ヲ縫テ進ム
- 一 寒気ハ摂氏零度以下 40 度ニ達ス

- 一 半年ハ日輪ヲ見、半年ハ日輪ヲ見ズ、3月11日頃ヨリ夜トナル
- 一 昼ハ日輪北東ヨリ出デ、日中ニハ北方ニ地平線上ヨリ40度ノ角度ヲ作り北西ニ至ル 夜ハ再ビ北西ヨリ北東ニ向テ動キ、夜半ニハ地平線ヨリ20度ノ角度ヲ作り北東ニ至ル
- 一 後段々短日トナリ、昼間1時間位トナリ、終ニ其形ヲ没ス、其レヨリハ半年間夜トナル、然シ夜間ト雖モ新聞位ハ読ミ得ベシ
- 一 南極磁極ハ南緯72度25分、東経155度15分ノ点ニ在リ
- 一 エドワード七世洲ニ上陸ス、上陸地点ハ断岸300尺以上ナリ、断岸1000尺ニ達スル処アリ
- 一 英国探検隊ハスコット大佐之ヲ率ヒ、ノルウェー探検隊ハアマンドソン海軍中尉之ヲ率ユ
- 一 白瀬探検隊ハ南極海上ニ70日、陸上ニ20日ヲ暮セリ、此間晴天2日アリシノミ、其他ハ饅頭粉ノ如キ雪毎日降ル
- 一 英国ノシャクリトン氏ハ先年南極ニ冬籠越年シタリ

(3) 清水家に残る任命状



6 その後の南極探検

昭和 31 年（1956）第一次南極探検隊「宗谷」の随伴船として、東京水産大学（現在の東京海洋大学）練習船「海鷹丸」が同行し、気象情報の提供、接岸地点の分析、物資補給及び事故発生時の救出援助などの任務を果たした。この「海鷹丸」の機関長として、棚尾本町 2 丁目出身の斎藤輝彦氏（斎藤光彦氏の弟）が参加している。

北棚尾村の分村 参考地図

